

うことでございますが、たまたま中島専務理事から、先程ご紹介がありました学会誌三十号と三十一号を送っていただきまして、そのうち中島さんの『ナウル、オーシャンの日本海軍』と、西野さんのエリスの著書を中心にしたドキュメントと申しますか、それを読ましていただきまして、おぼろげながらも昔の記憶が戻ってきたという現状でございます。

昔はナウル、オーシャンは日本の海軍では、一つの部隊でございます、第六十七警備隊という名称を持っておりました。ただ、なにぶんことにナウルとオーシャンは百六十マイルほど離れておりまして、オーシャンのほうはナウルの分遣隊ということで、任命された指揮官に、ほぼ全権が任されたような形で島の防備に当たっておったわけでございます。

この六十七警備隊というのは、オーシャンからまた東のほうに二百四十マイルぐらい行ったところにタラワ、マキン島を中心にした、ギルバート諸島がございます。現在キリバス共和国という独立国になっておりますが、タラワに第三特別根拠地隊というのがございまして、六七警は三特根の配下に属していたということでございます。

ご承知のようにマキン、タラワの玉砕がありまして、そのあと北のほうのクワジュリン（クエゼリン）の第六特別

根拠地隊の配下に入ることになったんですが、そのクワジュリンも昭和十九年の二月かと思いますが、玉砕いたしました、今度はトラック島の四特根の配下に入ると、もう転々と、いわゆる上級司令部が変わったのでございます。

いずれにしてもナウル、オーシャンは置いてきぼりをくっちゃったわけです。敵からも相手にされない、味方からも見放されたというような形で、昭和十八年の九月ぐらいからは、オーシャン島は完全に外界との接触を断たれました。十八年の十一月にはマキン、タラワに敵が来攻したわけでございますから、その直前から、敵の機動部隊による徹底的な破壊活動がございまして、それこそじゅうたん爆撃でたたかれました。

ああいうマキン、タラワのような珊瑚礁の島は、こっちの岸辺から上陸すると、どんな広いところでも向うの海が見れるというような、平たい砂地を中心とした非常に単純な地形でございました。マキン、タラワの戦闘は、敵の来攻の序幕から、逐一、柴崎司令官の電報がオーシャンでも傍受することできました、非常に悲惨な様相を呈しました。

もう、みんなドラムカンで個別のたこつぼを掘って、敵の爆撃を回避するわけですが、敵はじゅうたん爆撃と艦砲射撃で、十八年の九月ごろに二回ぐ

オーシャン島事件の概要

オーシャン島（現地名バナバ島）は周囲わずか十キロの小島で、南緯〇度五十三分、東経百六十九度三十二分に位置する孤島である。現在はキリバス共和国に属す。かつては良質なリン鉱石の産地として知られたが、この資源は一九七九年に枯渇している。

太平洋戦争開戦の翌昭和十七年八月二十六日、駆逐艦「夕暮」は、当時、英領であったオーシャン島に陸戦隊四十六名を揚げて無血占領した。翌二十七日、駆逐艦「白露」で第六根拠地隊の陸戦隊が到着し、前日占領した陸戦隊と交替した。

さらに四日後の八月三十一日、トラック発の第四十一警備隊派遣の陸戦隊が到着し、四日前からいた陸戦隊と交替した。この第四十一警備隊派遣の陸戦隊は、九月二日、マーシャル方面防備隊に編入され、オーシャン島に軍政が実施された。

翌昭和十八年二月十五日、海軍戦時編成の改定により、第四、第六根拠地隊からの現派遣員をもって、第六十七警備隊（司令・竹内武道大佐一兵三十八期）が新たに編成され、同日付で新編の第三特別根拠地隊に

編入された上で、ナウル島に本部を置き、ナウル、オーシャン両島の防備を担当することになった。

日本海軍が占領した時点でのオーシャン島の正確な人口の記録はないが、約七百人のバナバ人、約八百人のギルバート諸島人がいたというのが通説となっている。

戦局の進展に伴い、食糧補給の困難に直面したオーシャン島では、昭和十八年前半ころから、これらの島民をタラワ、コスラエ（クサイエ）、ナウル等へ次々と移送し、終戦時に同島にいたのは百数十名のギルバート諸島人男子であった。

ところが、オーシャン島の日本軍部隊は、終戦後間もなく、反乱を企てたとして、これらの残留島民全員を殺戮し、例外的に一名だけ生き延びた島民の証言により、部隊の関連幹部が戦犯として処刑された。

この終戦後の島民殺戮を、通称、オーシャン島事件という。

なお、この事件は公刊戦史にも記録がなく、長く謎に包まれていたが、今回の奈良賀男氏の講述により、その発生の遠因を含めて事情が明らかとなった。

〔中島 洋〕